

カナダのモンリオールは、北アメリカにありながらフランス系カナダ人が多数を占める独特の雰囲気がある街である。最近、ダウンタウンの目抜き通りであるセント・キャサリン通りを歩くと、イヌイットが道に座り、小銭を乞うている姿をよく目にするようになった。

カナダ・イヌイットの総人口は四万五〇〇〇人あまりであるが、そのうちの約五〇〇〇人が極北の村を離れ、南の都市部に住んでいる。モンリオールのイヌイット人口は推定八〇〇〇人あまりで、大半が女性である。モンリオールのイヌイットのなかには、先住民関連企業や政府



サン・ローラン通りにあるイヌイットが集まる「ミッドウェイ」。夕方になると、イヌイットが集まり始める。彼らにとっては、情報交換の場でもある

関連団体で仕事をしている人もいれば、福祉金や失業手当に頼りながら生活をしている人やホームレスの人もいる。このほかに短大や大学の学生や病氣治療のための専門病院に通っている人がいる。

都市在住のイヌイットの女性については、どのような生活を送っているのかほとんど知られていない。ここでは、仕事をもつ女性とホームレスの女性という対照的な生活を紹介しよう。

シエーラ（仮名）は、二三歳のイヌイットの女性。彼女は、数年前に短大を卒業し、「ジェームズ湾および北ケベック協定」の補償金を管理・運用するマキウィクというイヌイットの政治・経済団体に事務員として就職した。月収は二四



日中、ダウンタウンの目抜き通りで寝るイヌイットのカップル。人がまわりを通行しているにもかかわらず、熟睡している

〇カナダドルだ。彼女は、月七五〇カナダドル支払いのローンを組んで郊外にマンションの一室を購入し、自家用車で通勤している。趣味は、ビデオを借りてアクション映画やコメディ映画をみることである。彼女は、ほぼ毎日、故郷のクージュネックにいる母親や彼氏に電話連絡をとっている。また、年二度の長期休暇のために帰省している。彼女は、仕事を続けるかたわら、さらに専門的な知識を身につけ、よりよい仕事に就くために大学に通いたいと考えている。職場でイヌイット語を話すこと、ときどき故郷から送られてくるホッキョクイワナやカリブーの肉を食べることを除けば、彼女のライフスタイルは、モンリオールの中流階級のものとは大差がない。

酒と麻薬と男と女

一方、モンリオールに住むイヌイットの女性の大半は無職である。しかも飲酒や麻薬の問題を抱えている人が多い。ホームレスの女性も少なくない。

リジー（仮名）は、ウングア湾地域出身の三五歳の女性である。彼女はフランス系カナダ人と結婚し、二児をもうけたが、彼女の飲酒が原因で一〇カ月前に離婚した。子どもは前夫が引き取った。それ以来、彼女はホームレスとなり、街頭で通行人から小銭を乞う日々を送っている。一日五カナダドル以上の稼ぎになるが、これだけでは食べていけないから、先住民友好センターや女性用シェルター（一時的な緊急避難施設）で無料の昼食を、先住民女性専用のシェルターなどで無料の夕食をとることが多い。当然ながら、カリブーの肉といったイヌイット料理を食べる機会はほとんどない。

夜になると公園などの野外で寝ることが多い

都会のチャンスと危険

が、たまにはシェルターや友人の家に泊まることもある。教会の慈善施設やシェルターに行けば、シャワーを浴びることもできるので、彼女は週に四回はシャワーを浴び、二回は衣服を洗濯する。また、季節の衣服は先住民友好センターや女性用シェルターでもらうことができる。このように住む場所がないことや、雨風や冬の寒さに耐えなければならぬということを除けば、衣食はなんとかなる。

月に一度、前夫は子どもたちを彼女に会わせるために、待ち合わせの場所である先住民友好センターにやってくる。子どもと過ごすことができるこの数時間だけが彼女にとっての生きがいだ。子どもたちと一緒に住むことができない今、彼女は故郷に戻ることを考えているが、この前赴きした喧嘩の裁判が続いており、街を離れることはできない。彼女にとって、モンリオールは地獄のようなところだ。

彼女の地獄は、酒や麻薬からはじまった。今も毎日、ビールを飲んでいる。また、大麻もやっている。朝から公園で紙袋に隠したビールの大瓶を仲間と回し飲みをすることもあれば、友人のアパートで明け方までドチャーン騒ぎをすることもある。彼女らは金を出し合つてビールを買い、金がなくなるまで飲み続ける。バーでは金がなくても男性客がビールをふるまってくれるから、酒を欠かすことはない。酔ったあけくけんかをしたり、路上やバス、地下鉄のなかで大声でわめいたりするため、地元住民からは嫌われがちだ。彼女自身もよくない生活であるとわかっているが、抜け出せないでいる。また、イヌイットの女性のなかには、ビールや大麻を手に入れる金欲しさに売春をする者もいる。彼女らは、心が純粋な分だけ、だまされることも多い。

極北の村で生まれたイヌイットの女性は、仕事のため、勉学のため、病氣治療のため、夫やボーイフレンドに同行するため、家庭内暴力や性的虐待から逃れるためなどといったさまざまな理由で、モンリオールをはじめとする都市部へと移住する。そして移住して一カ月もたたないうちに勝ち組と負け組に別れ、負け組は底なしの貧困のなかであえぎ苦しむ生活を余儀なくさせられる。また、勝ち組であった女性が、酒や麻薬、離婚などを契機として負け組に転落することもある。その逆は、きわめて少ない。モンリオールのような大都市は、少数の勝ち組のイヌイットを作り出す一方で、数多くの酔いどれ天使を作り出す。イヌイットの女性にとつて異郷の未知なる大都市は、チャンスと危険にみちた場所といえよう。現在、私は都市イヌイットのコミュニティ開発に関する応用的な研究に従事している。



モンリオールの先住民友好センター。モンリオール地区に住む先住民にさまざまなサービスを提供している。ダウンタウンに住むイヌイットやホームレスのイヌイットの多くは、朝から夕方までインターネットやおしゃべりしながら過ごす



リタ・ノベリング。彼女は、カティヴィク教育委員会のモンリオール事務所にて20年以上勤め、事務局長を務めた。2005年秋に北ケベック生活連合(FCNQ)の代表取締役会長に就任。勝ち組の一人



モンリオールの先住民友好センターを訪れたイヌイットの女性たち。彼女らは、美しいが、明るく力強い

# モンリオールの酔いどれ天使

岸上 伸啓

(きしがみ のぶひろ)

先端人類科学研究部

